

## あかぎれ

ある日、蛇口から水の出る音がする台所へ行き、母の手を見た。あかぎれがある。親指、人差し指、中指、薬指、小指、それから手の甲まで。でも私は、何故だか痛そうだとは思わなかった。それどころか、とても温かいものが込み上げてきて、安心したのだ。

母は、毎年冬になると常備しているハンドクリームを丁寧に塗っては、「ひい、痛い」と言っている。不思議だ。ずっとそんなことを言っているのに、何故毎年あかぎれができていくのだろうか。予防はできないのだろうか。私はずっと疑問だった。だから、母に聞いてみた。「なんでそんなに切れちゃうの?」

と。すると、こんな答えが返ってきた。

「んー、そんなに水使っていないんだけどな」

そうなのか。それではやっぱり不思議だ。

そんなことを考えているとき、私は急に思い出した。鉛筆を握るだけでピキッと切れてしまう、あかぎればかりの真っ赤なあ頃の自分の手を。痛くて痛くて、手を唐辛子の粉の中に突っ込んでしまったみたいだった。友達からは心配され、よく痛そうだと声をかけられた。でも、それが嫌で、お願いだから手を見ないでほしい、もういつそのこと消えてしまいたいと思っていたあの頃の自分を。色々なことが蘇ってきて、そして自分の手を見た。なんて綺麗な手なのだろうか。ささくれが少しとガタガタな爪こそあるものの、あかぎれなどひとつもない。

そして私は気づいた。母は、何一つ文句など言わず、ずっと陰から支えて見守っていてくれたから、手がこんなに切れてしまっているのだ、と。「ありがとう、お母さん。本当にありがとう」という自然と湧いた気持ち、あの、あかぎればかりの母の手を温かく見せ、私の心を安心させたのかもしれない。母の「母」としての生き抜く力はとても強かった。そう感じた。そして、私も将来、こんな「母」になってやろうと思った。